

# APU 日本語上級学習者に対するメディア利用に関する意識調査報告

深山 道助

## アブストラクト

現在、立命館アジア太平洋大学（APU）の言語教育センターでは、2011年度のカリキュラム改革に向け、各方面での準備が進められている。日本語教育部門においては、新たに選択科目として「プロジェクト」が設けられることになっている。その「プロジェクト」の内容の一部として、「メディア日本語 Ⅰ」、「メディア日本語 Ⅱ」という科目が考えられている。この中では、主にメディアを利用して4技能を高め、批判的に情報を読み解き、情報発信する能力を養うことがねらいとして挙げられている。このような目的を遂行するためには、新カリキュラム開始前にAPUの日本語学習者がどのようにメディアを利用しているのか、メディアに対してどのような意識を持っているのかといったことを把握しておく必要がある。

本調査報告では、APUの日本語上級学習者を対象に、「情報収集」「情報選択」「情報発信」といった情報の扱いに関する項目を中心に意識調査を行った。その結果、図書館の活用技術、信頼性のある情報の選択技術、まとまりのある文章の作成技術と多様なメディア素材の編集技術の指導を強化する必要があるという結論に達した。本調査から得られた結果が今後のAPUにおける日本語教育に役立つことを期待する。

**キーワード：**メディア、リソース、アカデミックスキルズ、メディア・リテラシー、自律学習

## 1. はじめに

現在、立命館アジア太平洋大学（以後APUと称す）の言語教育センターでは、2011年度のカリキュラム改革に向け、各方面での準備が進められている。日本語教育部門においては、以下の点が改革のねらいとして挙げられている（2010年4月現在）。

必修を16コマとし、日本語の基礎をしっかりと養う。

必修を終えた後、選択として日本語学習を継続し、自分を表現する力、日本の社会、文化についてのリテラシーを身につける。

教養、ビジネス、プロジェクトなど、学生のニーズや目的に合ったコースを選択し、アカデミックスキルズ、就職や社会人として必要な日本語、コミュニケーション能力を養う。

多様なリソースを利用し、自らが積極的に日本語を身につける力を養う。

この中で、新しく設けられる「プロジェクト」の内容の一部として、「メディア日本語 Ⅰ」、「メディア日本語 Ⅱ」といった科目が考えられている。それぞれの内容は以下の通りである（2010年4月現在）。

「メディア日本語 Ⅰ」

ニュースを聞くことにより、語彙力を高め、聴解能力を養う。

ニュースで扱われる日常の出来事から日本の社会について学ぶ。

「メディア日本語 Ⅱ」

新聞記事を批判的に読み、新聞社に自分の意見を投稿する。

インタビューなどを含めた『留学生新聞』を発行する。

以上のことから、2011年度のカリキュラム改革のねらいの一つは、具体的なメディアを活用してアカデミックスキルズやコミュニケーション能力を養い、その過程で、情報収集能力、情報選択能力、情報発信能力といったメディア・リテラシーのスキルを身につけることだと解釈できるだろう。また、多様なリソースを利用し、自律的に日本語運用能力

を身につけることもねらいとして挙げられているが、この「多様なリソース」というのは、学習者が接するであろう「多様なメディア」と言い換えてもよさそうである。そして、このカリキュラム改革を成功させるためには、APUの日本語学習者がどのようにメディアを利用しているのか、メディアに対してどのような意識を持っているのかといったことを把握しておく必要がある。

しかしながら、APUの日本語教育の中では、日本語を学ぶ学習者のメディア利用に焦点を当てた調査がこれまで行われてこなかったようだ。そこで、本調査報告では、APUの日本語上級学習者を対象に、「情報収集」「情報選択」「情報発信」といった情報の扱いに関する項目を中心に、アンケート用紙を用いて意識調査を行った。そして、その調査結果を2011年度からの新カリキュラムのために役立てることを本調査の目的とする。今回行ったアンケート調査は、元々、自律学習の研究のために実施したものであるが、その調査結果は新カリキュラムのためにも参考になると考える。本報告では、調査結果を図表で示し、概観を述べることに重点を置き、詳細な分析については今後の課題とする。

2. 調査の方法

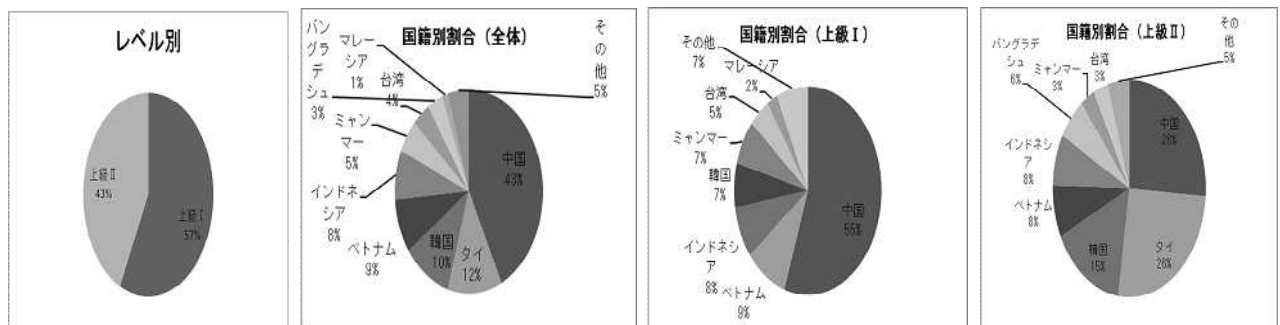
本調査では、2009年度秋学期に「日本語上級」または「日本語上級」のコースを受講していた正規留学生を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査の期間は、学期末にあたる2010年2月2日から2月9日までの8日間で、アンケート用紙の配布、回収は各コース担当の教員に依頼し、教員が直接回収できなかった分については、教員室前に回収箱を設置し、学生が自分で提出できるようにした。アンケート用紙のデータはオンラインアンケート集計システム(boronsha-Web Questionnaire)を利用し、学生アシスタントにデータ入力作業を依頼し、その入力データを基に分析を行った。

本学期の両コースの受講者総数は上級が236名、上級が172名であった。このうち、158名(コース不明2件を除く)の回答があり、上級では90名が回答、上級では68名が回答した。また、非正規学生(2件)国籍不明(4件)を除外した。したがって、有効サンプル総数は152件で、上級87件(有効回答率36.9%)、上級65件(有効回答率37.8%)である。被調査者の国籍の内訳は、表1のとおりである。レベル別と国籍の割合は下の円グラフに示す。

表1 国籍内訳(有効サンプル152件中)

国籍	総数	上級	上級	国籍	総数	上級	上級
中国	65 (42.8%)	48 (55.2%)	17 (26.2%)	マレーシア	2 (1.3%)	2 (2.3%)	0
タイ	18 (11.8%)	1 (1.1%)	17 (26.2%)	モンゴル	1 (0.7%)	0	1 (1.5%)
韓国	16 (10.5%)	6 (6.9%)	10 (15.4%)	シンガポール	1 (0.7%)	0	1 (1.5%)
ベトナム	13 (8.6%)	8 (9.2%)	5 (7.7%)	インド	1 (0.7%)	1 (1.1%)	0
インドネシア	12 (7.9%)	7 (8.0%)	5 (7.7%)	ナイジェリア	1 (0.7%)	0	1 (1.5%)
ミャンマー	8 (5.3%)	6 (6.9%)	2 (3.1%)	ドイツ	1 (0.7%)	1 (1.1%)	0
台湾	6 (3.9%)	4 (4.6%)	2 (3.1%)	ベルギー	1 (0.7%)	1 (1.1%)	0
バングラデシュ	5 (3.3%)	1 (1.1%)	4 (6.2%)	日本(タイ語)	1 (0.7%)	1 (1.1%)	0

図 レベル別割合と国籍別割合



### 3. 調査内容

次にアンケートの質問項目について説明する。学習者がメディアをどのように利用し、メディアに対してどのような意識を持っているのかを把握するため、質問項目を、メディアのコンテンツについて（問1～問3）、情報の収集について（問4～問7）、情報の信頼性と選択について（問8～問16）、情報の発信について（問17～問25）、ネチケットについて（問26）の5つに分類した。アンケートの質問項目の内容は表2のとおりである。主に、メディア・リテラシーに関わる「情報収集」、「情報選択」、「情報発信」の三つの要素についての質問で構成されている。

表2 質問項目

メディアのコンテンツについて	
1	テレビやインターネット（パソコン、携帯電話など）で新聞やニュースを見るのが好きだ。
2	テレビやインターネットでアニメ、ドラマ、映画、音楽番組、スポーツなどを見るのが好きだ。
3	テレビやインターネットで語学番組、教育番組、教養番組などを見るのが好きだ。
情報の収集について	
4	図書館で必要な資料を探すのが上手だ。
5	インターネットで必要な情報を探すのが上手だ。
6	他の学生よりも情報を探す能力が高い。
7	インターネットを利用すれば、知りたい情報をほとんど得ることができる。
情報の信頼性と選択について	
8	紙版の新聞より、インターネット版の新聞をよく読む。
9	新聞やニュースは事実を客観的に伝えている。
10	インターネットを利用すれば、いいレポートや論文を書くことができる。
11	レポートや論文を書くとき官公庁や企業などが公開しているHPの記事を参考・引用する。
12	レポートや論文を書くとき専門家や研究者などが公開しているHPの記事を参考・引用する。
13	レポートや論文を書くとき専門家や研究者以外の有名人が公開しているHPの記事を参考・引用する。
14	レポートや論文を書くとき一般個人が公開しているホームページの記事を参考・引用する。
15	レポートや論文を書くときメディアセンターが所有している学術データベースの資料を参考・引用する。
16	レポートや論文を書くとき「ウィキペディア」や「yahoo 知恵袋」などの掲示板や事典の記事を参考・引用する。
情報の発信について	
17	自分の国（地域）の歴史、文化、習慣をよく知っている。
18	自分の国（地域）のことで知らないことが多い。
19	自分の国（地域）のことをより深く知りたい。
20	自分の国（地域）のことを他の国（地域）の人に積極的に紹介したい。
21	メール、チャット、スカイプなどで家族や友人と情報交換するのが好きだ。
22	SNS（会員同士の交流や社交のためのサイト）で他のメンバーと情報交換するのが好きだ。
23	カメラやビデオカメラで撮影した画像を編集して作品にし、他の人に見せるのが好きだ。
24	インターネットでブログを書いてみたい。
25	新聞（紙版）やインターネットのHPを作成して、様々な情報を発信してみたい。
ネチケットについて	
26	インターネット上のマナー（ネチケット）を守っている。

以上の各質問項目について、下記のように6件法の択一式で回答してもらい、その回答をコーディングし、得点化した。コード番号は、次章の調査結果の図中に記載されている番号と対応している。また、レベル比較の図中に記載されている「A1」「A2」というのは、それぞれ「日本語上級 コース」「日本語上級 コース」のことである。6件法を採用した理由は、「どちらともいえない」という中立の回答を除外することにより、正負の傾向をより示しやすくするためである。なお、質問項目には、正負の逆転項目と考えられるものも存在するが、本調査では、全ての項目の総得点を分析対象としないので、逆転処理は行っていない。

- A 強くそう思う(コード番号 6=6点)
- B ややそう思う(コード番号 5=5点)
- C どちらかといえばそう思う(コード番号 4=4点)
- D どちらかといえばそう思わない(コード番号 3=3点)
- E あまりそう思わない(コード番号 2=2点)
- F ぜんぜんそう思わない(コード番号 1=1点)

#### 4. 調査結果

次に、調査結果をグラフにして示す。今回の報告では、グラフ上で目立った特徴がある箇所とレベル間の差がある箇所の分析・考察に留める。まず、学習レベル間で各質問項目の得点の平均に有意差があるかを検証するため、帰無仮説「上級 (A1)と上級 (A2)の異なる学習レベルにおいて等しくなる」を立て、A1とA2のレベル間でt検定を行った。その結果、問1、問6、問11、問12、問16、問19、問20、問21の8項目において帰無仮説が棄却され、有意差が認められた(表3)。

表3 平均値と標準偏差、t値一覧

	全体(152名)		上級 (87名)		上級 (65名)		t検定 t値(p<.05)
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
問1	4.54 (n=151)	1.24	4.36 (n=87)	1.24	4.78 (n=64)	1.19	2.10
問2	5.36 (n=152)	0.83	5.43 (n=87)	0.72	5.26 (n=65)	0.95	-1.20
問3	3.94 (n=152)	1.38	3.80 (n=87)	1.38	4.12 (n=65)	1.35	1.41
問4	4.01 (n=152)	1.13	3.91 (n=87)	1.10	4.14 (n=65)	1.15	1.25
問5	5.11 (n=150)	0.90	5.19 (n=85)	0.86	5.00 (n=65)	0.93	-1.27
問6	4.28 (n=152)	0.99	4.14 (n=87)	0.92	4.46 (n=65)	1.05	2.00
問7	5.03 (n=152)	0.88	5.10 (n=87)	0.77	4.92 (n=65)	1.00	-1.25
問8	4.49 (n=152)	1.29	4.34 (n=87)	1.36	4.69 (n=65)	1.15	1.65
問9	4.38 (n=152)	0.97	4.41 (n=87)	0.94	4.34 (n=65)	1.01	-0.47
問10	4.76 (n=152)	1.07	4.79 (n=87)	1.03	4.72 (n=65)	1.13	-0.40
問11	4.76 (n=152)	1.04	4.57 (n=87)	1.09	5.02 (n=65)	0.90	2.63
問12	4.78 (n=152)	0.95	4.61 (n=87)	1.03	5.02 (n=65)	0.75	2.66
問13	4.62 (n=151)	1.02	4.55 (n=87)	1.06	4.70 (n=64)	0.95	0.90
問14	4.02 (n=151)	1.28	4.07 (n=87)	1.14	3.95 (n=64)	1.44	-0.55
問15	4.52 (n=151)	1.15	4.49 (n=87)	1.11	4.55 (n=64)	1.20	0.28
問16	4.20 (n=152)	1.37	4.39 (n=87)	1.28	3.94 (n=65)	1.45	-2.02
問17	4.70 (n=152)	0.97	4.66 (n=87)	0.97	4.75 (n=65)	0.96	0.62
問18	3.97 (n=151)	1.26	3.84 (n=86)	1.25	4.15 (n=65)	1.26	1.53
問19	4.99 (n=152)	1.01	5.10 (n=87)	1.04	4.83 (n=65)	0.94	-1.66

APU 日本語上級学習者に対するメディア利用に関する意識調査報告

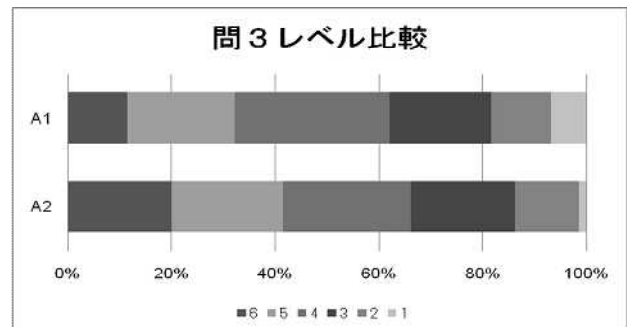
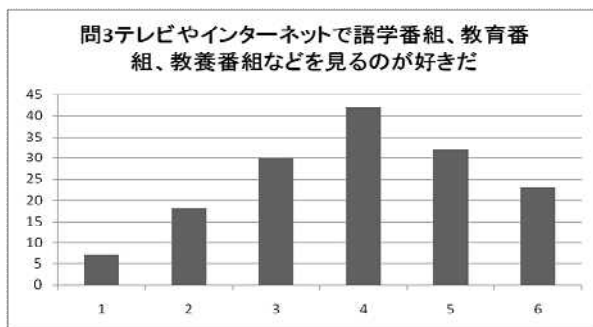
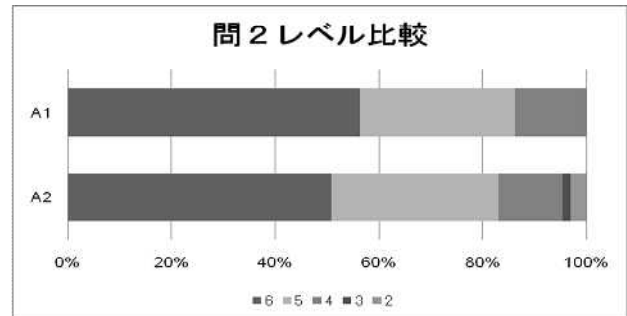
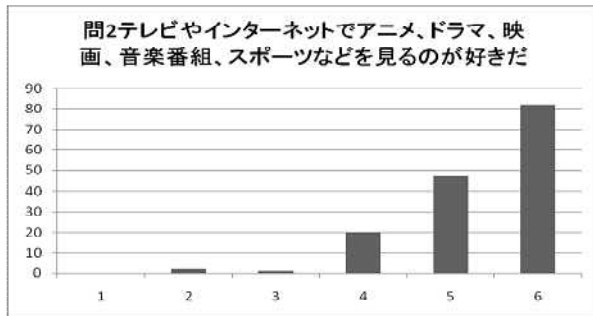
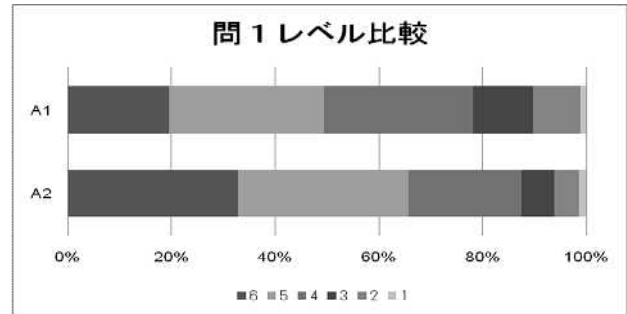
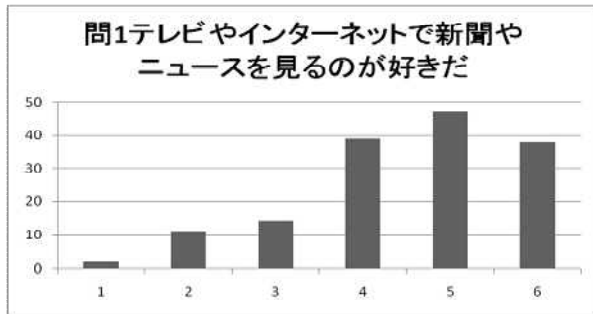
問 20	4.99 (n=152)	0.95	5.10 (n=87)	0.90	4.85 (n=65)	1.00	-1.66
問 21	5.24 (n=152)	0.82	5.37 (n=87)	0.80	5.06 (n=65)	0.80	-2.31
問 22	3.90 (n=152)	1.28	3.82 (n=87)	1.28	4.02 (n=65)	1.26	0.95
問 23	4.25 (n=151)	1.32	4.16 (n=87)	1.41	4.38 (n=64)	1.19	0.98
問 24	4.07 (n=151)	1.48	4.05 (n=86)	1.52	4.11 (n=65)	1.42	0.25
問 25	4.14 (n=152)	1.31	3.99 (n=87)	1.33	4.34 (n=65)	1.27	1.63
問 26	5.17 (n=151)	0.91	5.23 (n=86)	0.91	5.09 (n=65)	0.91	-0.93

(網掛けは有意差が認められた項目)

#### 4.1 メディアのコンテンツについて

まず、学習者がどのようなメディアのコンテンツを好んで利用しているのかについて質問した。その結果を問1～問3の図に示す。全体的にみると、学習者は、テレビやインターネットで新聞やニュースを見るより、アニメ、映画、音楽番組、スポーツなどの「サブカルチャー」的なコンテンツを見ることを好む傾向があることがわかる。また、語学番組、教育番組、教養番組については、学習者によって好き嫌いが分かれる結果になった。レベル間を比較すると、問1で有意差が認められたことから、A2のほうがA1より新聞やニュースを好んで見ている可能性が高いことがわかった。

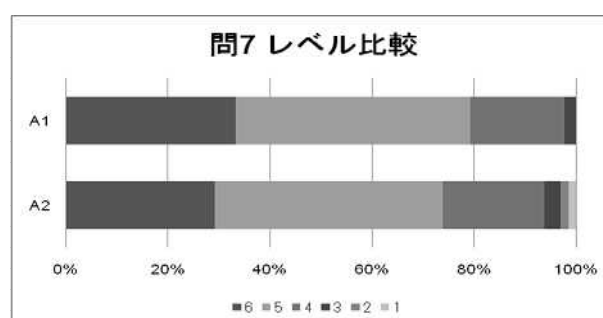
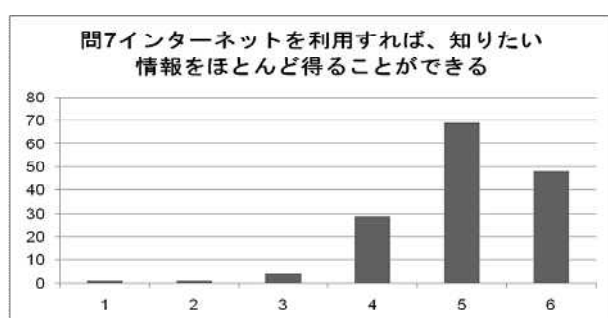
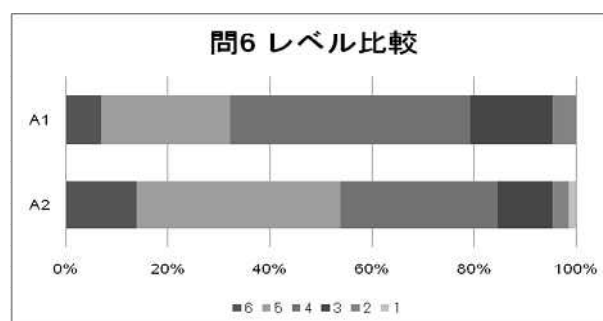
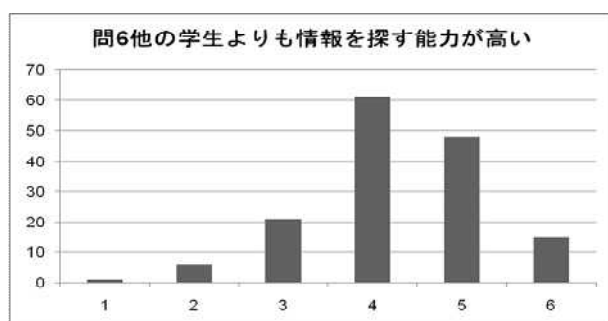
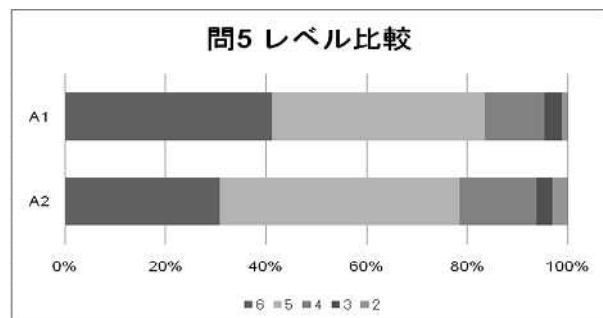
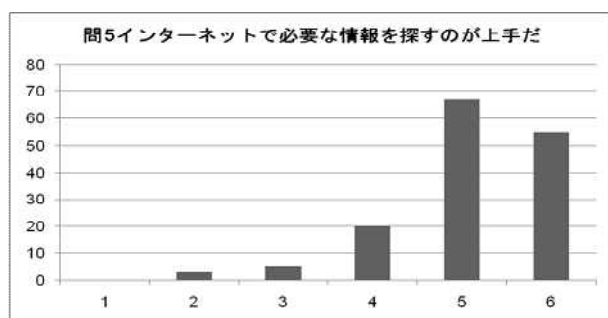
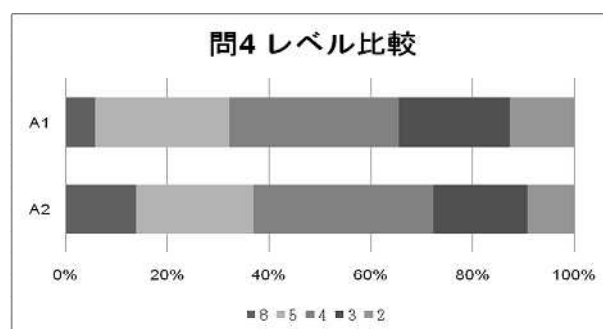
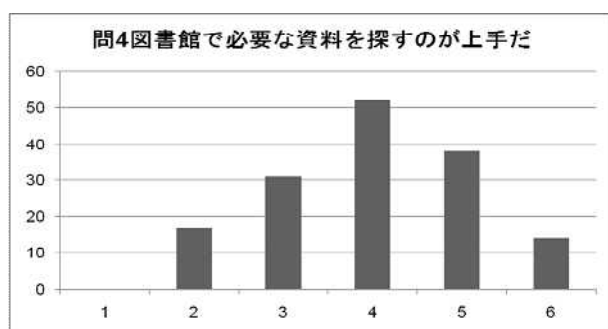
以上の結果から、APUの日本語上級学習者は、時事や教養などの社会的なコンテンツに対する興味関心度がサブカルチャーに対する興味関心度よりも低い、学習レベルが高くなれば興味関心度が高くなるといえそうだ。今後、初期の学習段階から社会的な内容を取り入れた授業を考え、指導を行う必要があるといえる。



## 4.2 情報の収集について

次に、情報の収集に対する意識について質問した。その結果を問4～問7の図に示す。まず、全体的にみると、多くの学習者は、図書館よりもインターネットで必要な情報を探すほうが得意だと感じていることがわかる(問4、問5)。また、インターネットを利用すれば容易に情報を収集できると感じている学習者が多いようだ(問7)。一方、レベル間をみても、問6で有意差が認められたことから、A2のほうがA1よりも「他の学生と比べ自分のほうが情報を探す能力が高い」と感じている可能性が高いことがわかる。

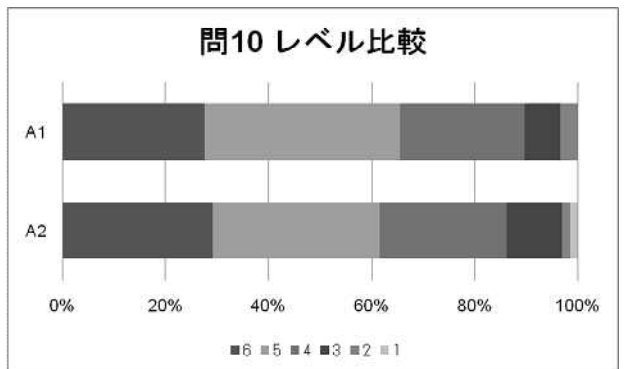
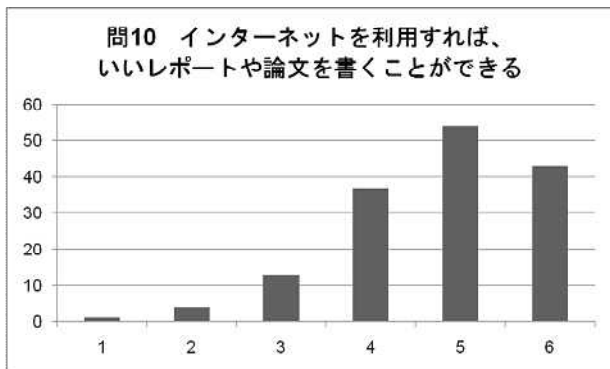
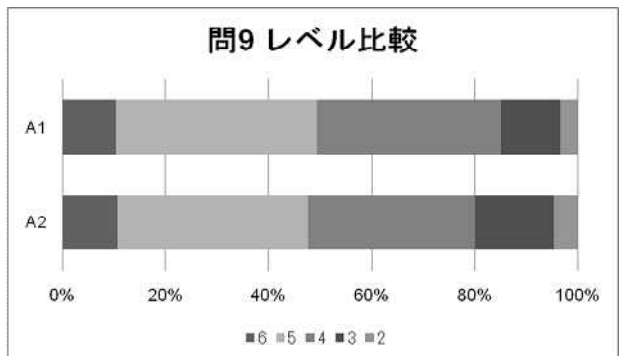
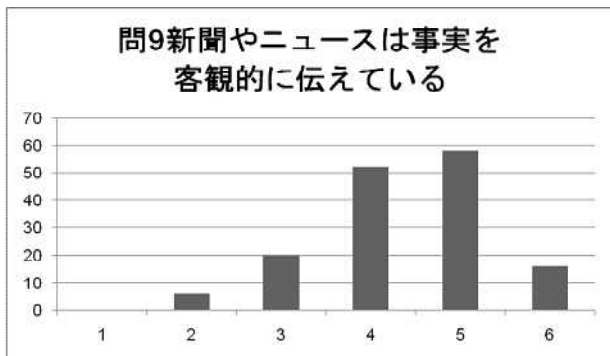
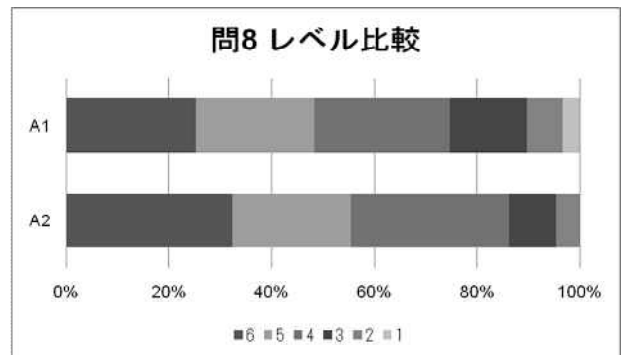
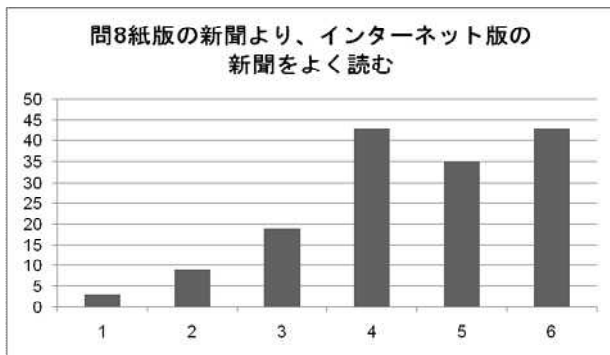
以上のことから、APUの日本語上級学習者は、情報収集をインターネットに依存する傾向が強いことがわかる。今後、インターネット以外の方法で情報を収集する訓練も必要である。そのためには、図書館やSALC(Self access learning center)の幅広い利用方法について、十分な時間を割いて指導する必要があるといえる。

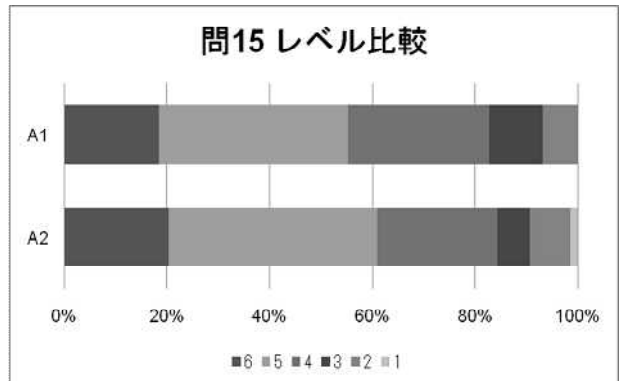
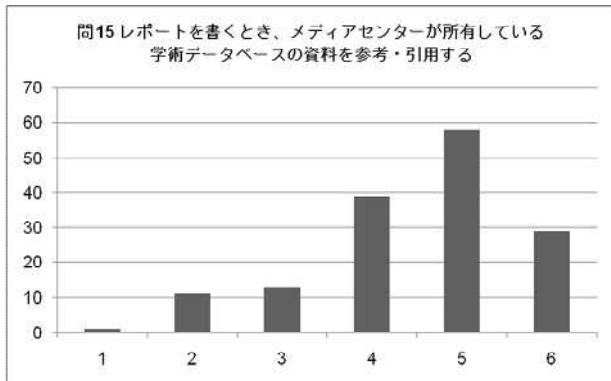
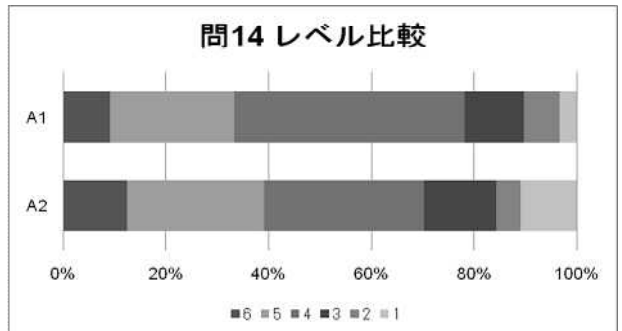
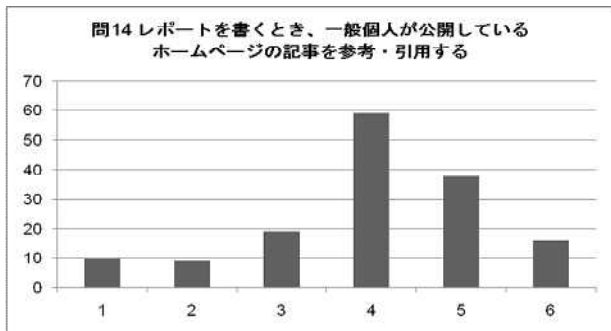
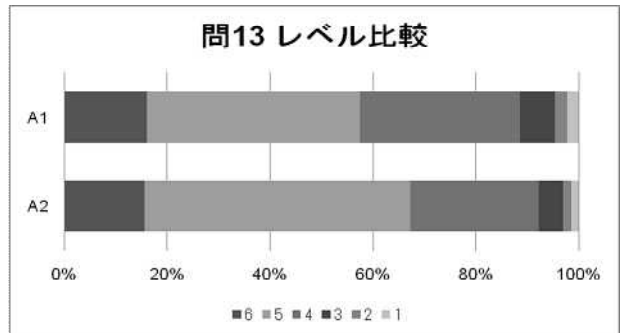
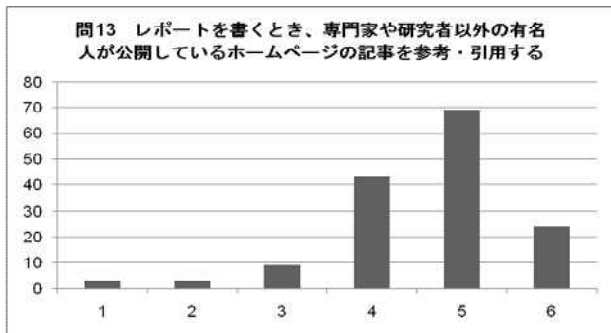
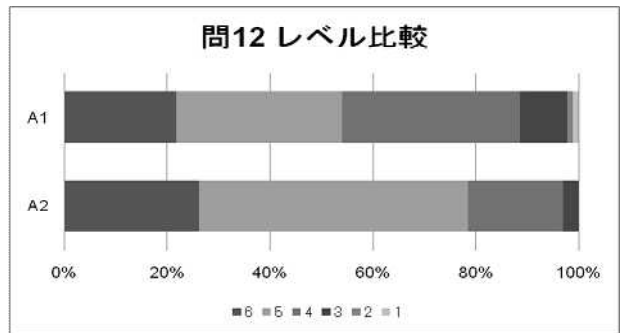
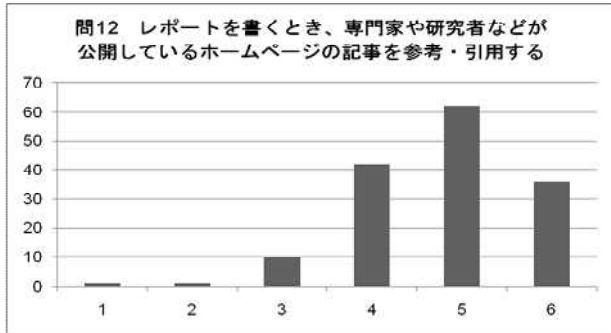
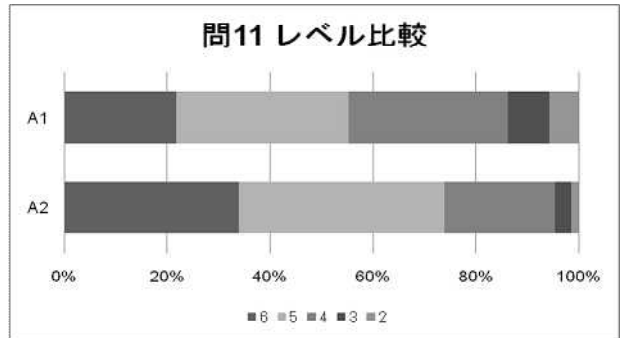
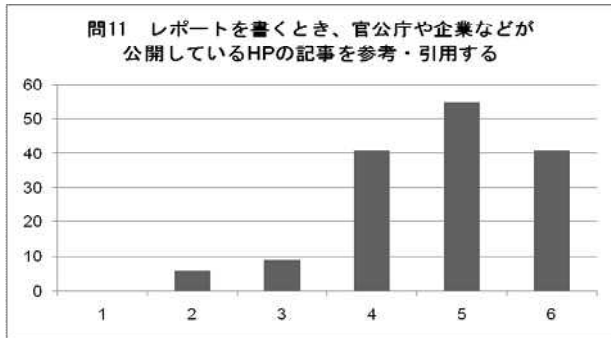


### 4.3 情報の信頼性と選択について

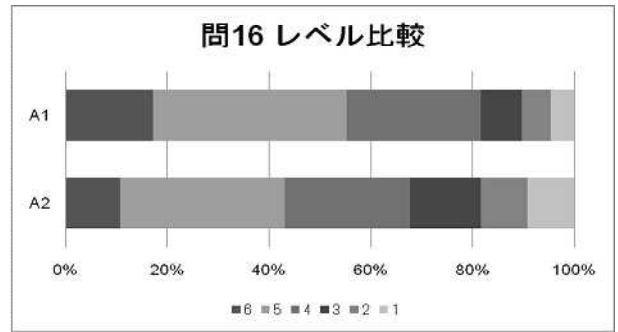
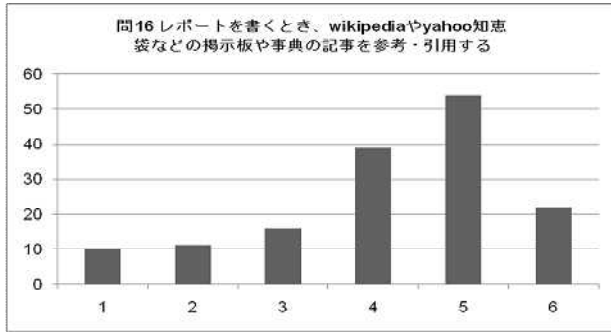
次に、情報の信頼性と情報選択について質問した。その結果は問 8～問 16 の図に示す。まず、全体的に、学習者はインターネット上で新聞を読むことが多いようだが、紙版の新聞を読んでいる学習者もいることがわかる(問 8)。また、学習者は全体的に、新聞、ニュースの内容について客観性があると感じているが、「強くそう思う」はそれほど多くなく、全面的に信用しているわけではないことが見て取れる(問 9)。レポート作成に関する項目では、ほとんどの学習者がインターネットを利用すれば、いいレポートや論文が書けると感じていることがわかる(問 10)。また、レポート、論文を書くための資料については、信頼性の高い情報源を利用していると回答した学習者が比較的多いが、信頼性の低いものを利用しようとする学習者も少なからず存在することがわかる(問 11～問 16)。一方、レベル間を見ても、問 11、問 12、問 16 で有意差が認められたことから、A1 より A2 のほうが信頼性の高い情報源を利用していると感じている可能性が高いことがわかる。

以上のことから、APU の日本語上級学習者は、レポート作成のために利用する資料の信頼性に対して適切な判断ができていないといえない。特に、A2 の学習者の中に、メディアセンターが所有している学術データベースを利用しないものがあることや、ウィキペディアなどの匿名性の高い情報を利用するものがあることなどから、初期学習段階からアカデミックスキルズとメディア・リテラシーの指導が必要だといえる。





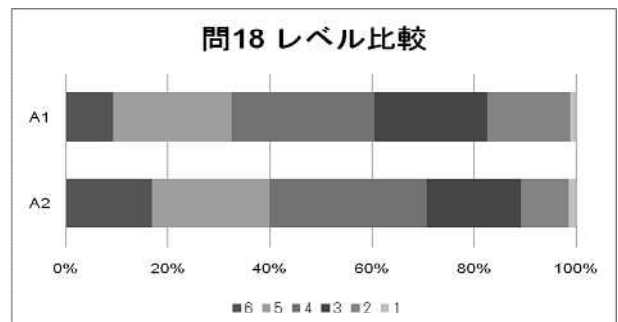
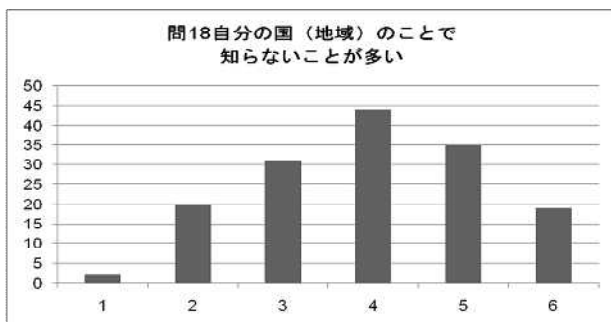
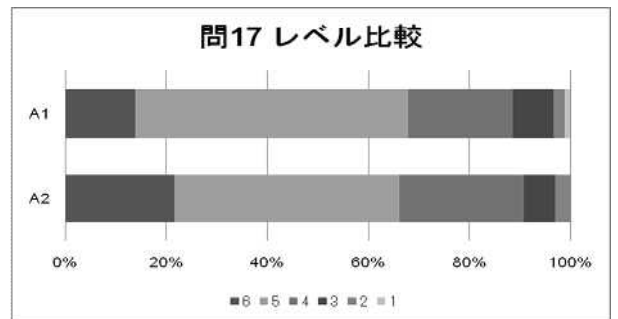
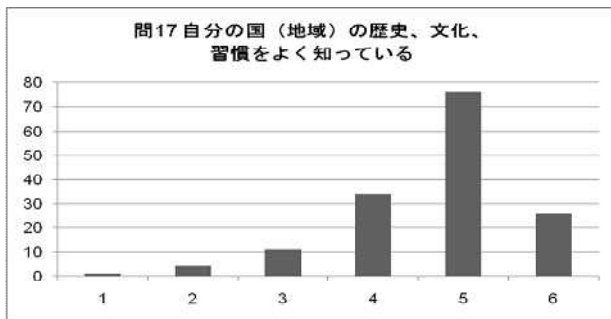


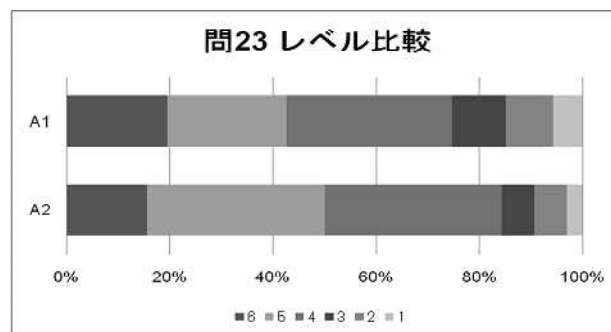
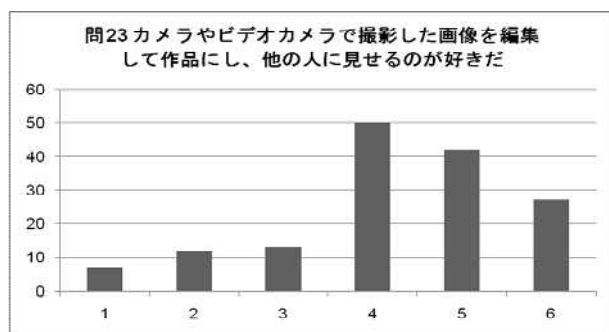
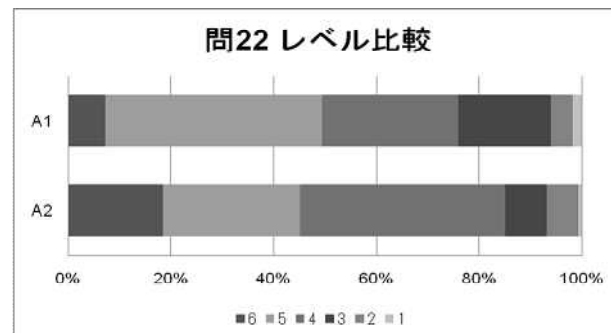
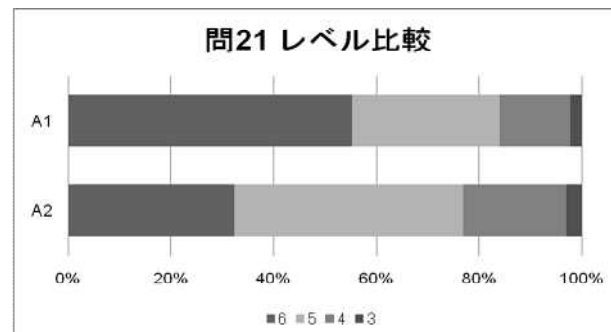
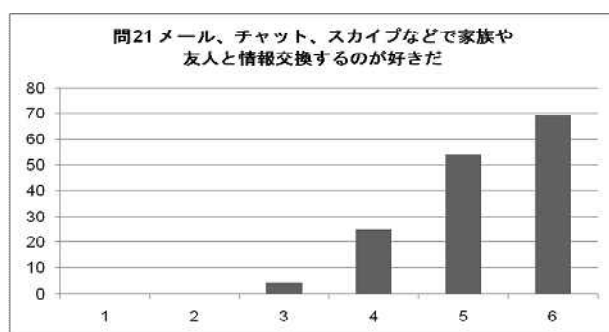
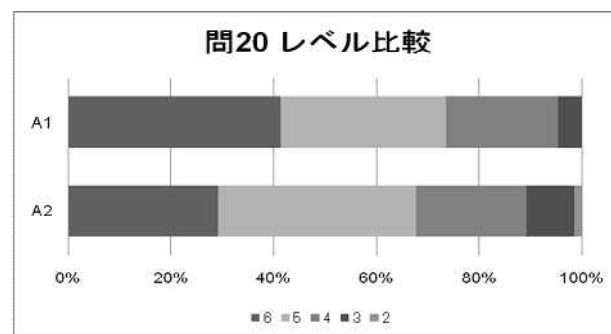
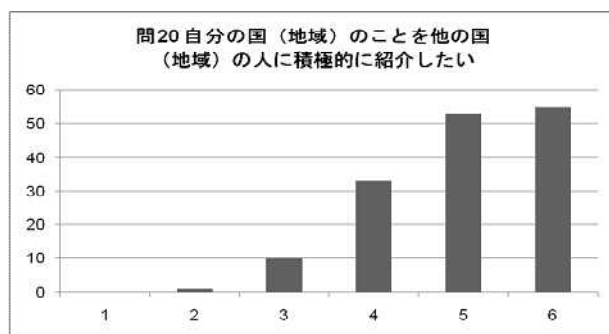
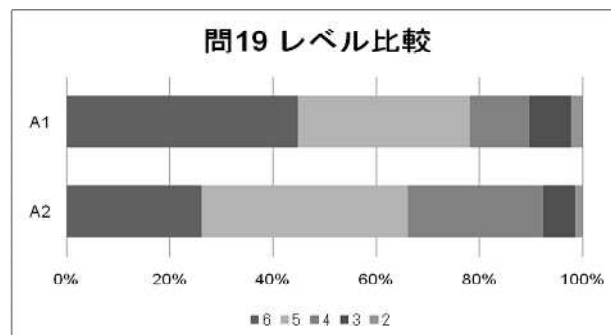
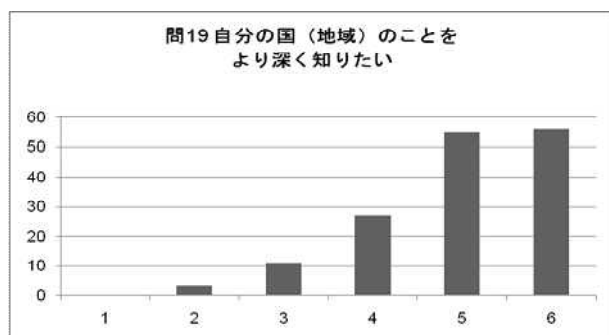


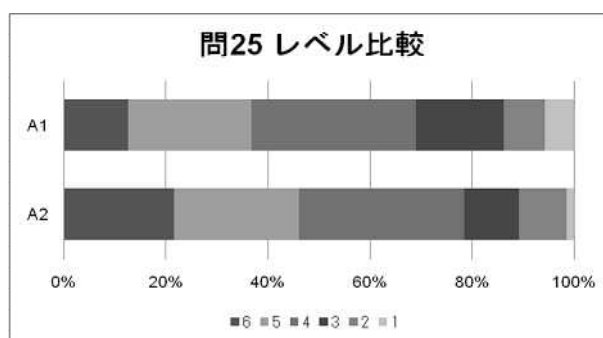
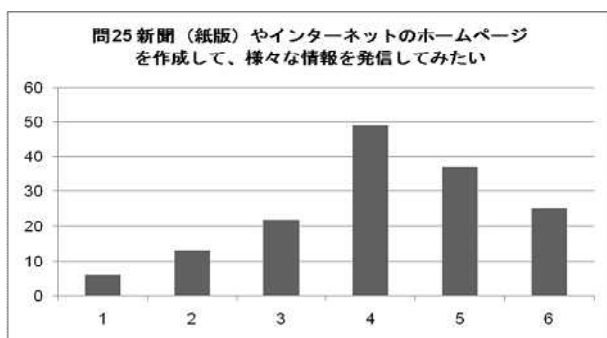
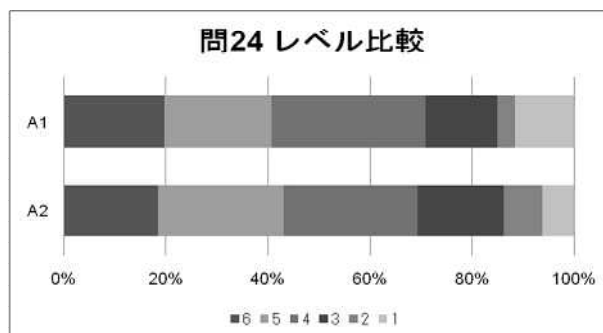
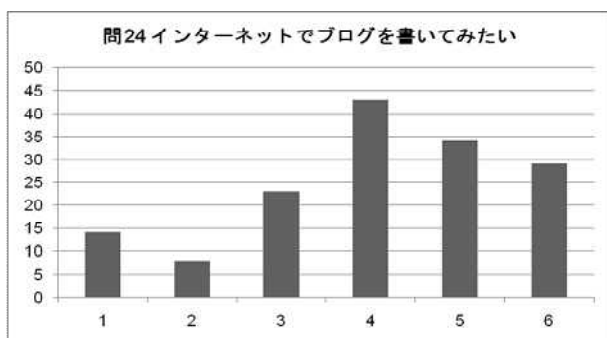
#### 4.4 情報の発信について

次に、情報の発信について質問した。その結果は問 17～問 25 の図に示す。まず、全体的に見ると、学習者は自国の歴史、文化、習慣についてよく知っている一方で、知らないことも多いと感じていることがわかる(問 17、問 18)。また、より深く自国のことについて知りたいという意識が高いことが見て取れる(問 19)。さらに、ほとんどの学習者が自国のことを他の国の人に紹介したいと感じていることがわかる(問 20)。情報発信の手段としては、ほとんどの学習者がメール、チャット、スカイプなどを好んで使っているようだが、SNS は好き嫌いが分かれるようだ(問 21、問 22)。また、カメラやビデオカメラで作品を作って情報発信することや、ブログを書いたり、新聞、HP などを作成したりすることも、好き嫌いが分かれるようだ(問 23、問 24、問 25)。つまり、学習者はメール、チャット、スカイプなどの単発的で、短いメッセージの情報発信を好む傾向があり、ブログや新聞、HP といった、文章の推敲能力や多様なメディア素材の編集能力が求められる情報発信は好みが変わる結果になった。レベル間の差を見てみると、問 19、問 20 で有意差が認められたことから、A1 のほうが A2 よりも強く自国のことを知りたいと感じ、かつ、自国の情報を発信したいと感じている可能性が高いことがわかる。また、問 21 でも有意差が認められたことから、A1 のほうが A2 よりも、メール、チャット、スカイプなどを好んで使っている可能性が高いことがわかった。

以上の結果から、APU の日本語上級学習者は、ある程度のまとまりのある情報や多様なメディア素材を編集し、発信することに対してやや消極的だと考えられる。アカデミックな内容の情報発信能力を養うという観点からみると、自ら収集、選択した情報の編集能力と発信能力を養う活動を増やし、動機づけを高める必要があるといえる。

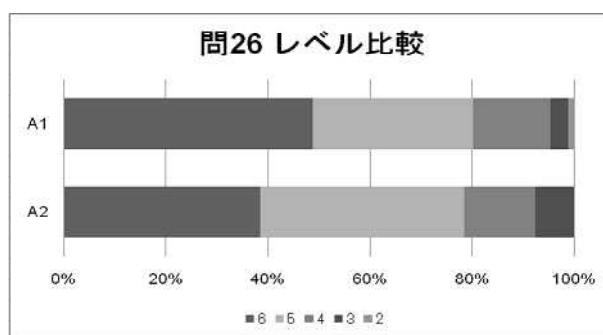
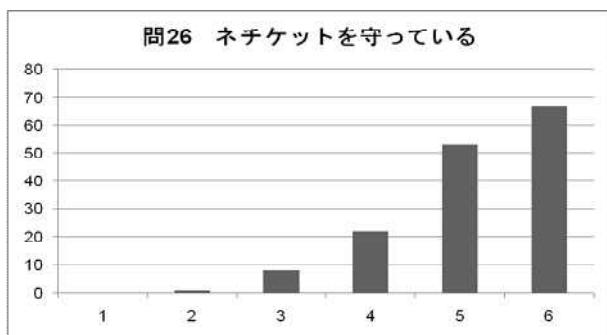






#### 4.5 ネチケットについて

最後に、ネチケットの意識について質問した。その結果、A1、A2ともネチケットに対する意識は比較的高いことがわかった（問26）。



#### 5. まとめ

以上、APUで日本語を学ぶ留学生のメディア利用についての意識を調べ、その調査結果の概要を述べた。そして、主にメディアを利用して4技能を高め、批判的に情報を読み解き、情報発信する能力を養うためには、図書館を活用した情報収集技術、信頼性のある情報を見極める情報選択技術、まとまりのある文章の作成技術と多様なメディア素材の編集技術といった、アカデミックスキルズとメディア・リテラシーを、今まで以上に積極的に指導する必要があるという結論に達した。

今回の報告では、各質問項目とレベル間の差について、図表から見て取れることを簡単に述べたが、漢字圏と非漢字圏の比較、質問項目間の相関関係、学生の成績との相関関係など、個々の詳細な分析については今後の課題としたい。この調査報告を2011年度からの新カリキュラムのために役立てていただければ幸いです。

本調査は、財団法人博報児童教育振興会による「2009年度第4回ことばと教育研究助成」(研究タイトル:「多文化環境における日本語学習を維持し高めるための動機分析」研究代表者:須藤潤)の助成を受けて行いました。

**参考文献**

- 石村貞夫、加藤千恵子、劉晨(2009)『やさしく学ぶ統計学 Excelによるアンケート処理』東京図書
- 鈴木みどり編(1997)『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
- ゾルタン・ドルニエイ(2006)『外国語教育のための質問紙調査入門』(八島智子、竹内理監訳)松柏社
- 文化庁(2009)『平成20年度国語に関する世論調査 情報化時代の言語生活』ぎょうせい